

もくじ 千住大川町の日本画家、池澤青峰 … P1 千葉さなと甲府 … P2
文化遺産調査ガイドブック稿②谷文晁の家 … P3

足立史談

第 628 号

2020 年 6 月 15 日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

昭和足立の芸術家
千住大川町の日本画家、池澤青峰
小林 優

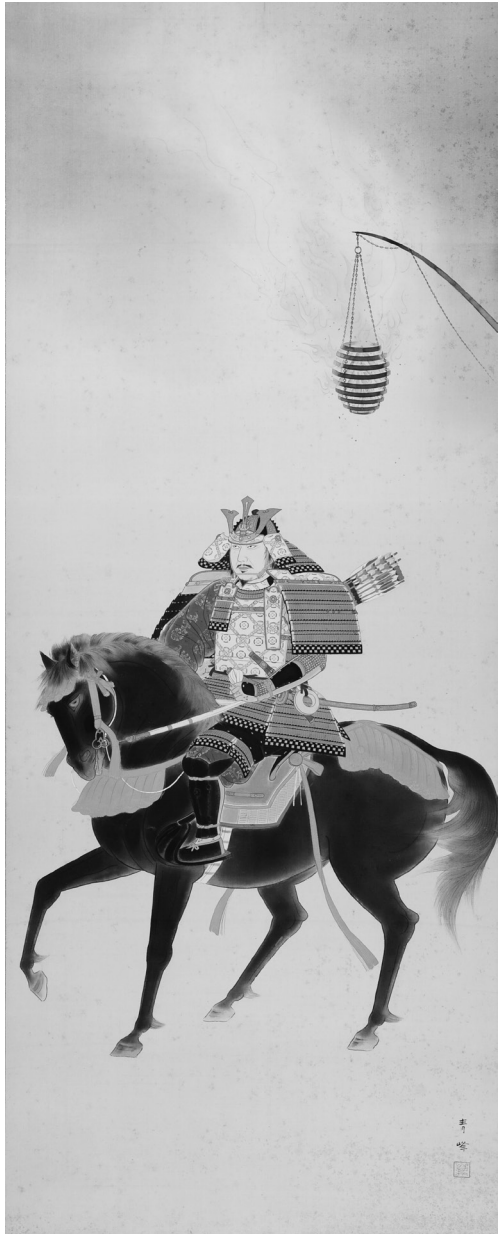


図 1 池澤青峰 《楠木正成像》
絹本着色 昭和時代初期～30 年頃
当館蔵 池澤青峰ご遺族寄贈

千住宿が栄えた江戸時代以来、足立には建部巢光や村越其栄・向榮親子をはじめ、多くの絵師（画家）が現れ、地域の人々と共に「足立の芸術文化史」を形作ってきました。そしてその文

化の流れは、途切れることなく昭和戦後にも続いていきます。今回は昭和の足立に暮らし、地域の人々に支えられた画家として、千住大川町の日本画家、池澤青峰（いけざわせいほう、

一八九九～一九六〇）についてご紹介いたします。■日本画家、池澤青峰 青峰の経歴は未だ調査の途上であり、不詳の部分も多くあります。現在までに明らかになっていく足跡を書き出せば、青峰はまず、明治三十一（一八九九）年、大阪府大阪市に吉太郎の名で生まれます。生家の詳細や画家を志した経緯は定かではありませんが、やがて上京し、歴史画を得意として官展（文展・帝展など政府主催の美術展覧会）で活躍した葛谷龍岬（つたやりゆうこう、一八八六～一九三三）に師事し、また、同じく歴史画の大家で財団法人日本美術院の初代理事長にもなる安田靉彦（やすだゆきひこ、一八八四～一九七八）にも学んだとされます。いずれも、古画の研究と大和絵調の画法に立脚し

た画家であり、青峰もそれを引き継いで、図 1 に掲げた《楠木正成像》のように大和絵の精緻な線描と色彩で歴史上の人物・出来事を描くことを、自身の画風の一傾向にしたと見られます。そして、大正十一（一九二二）年の第三回帝展で初入選を果たし、その後も官展での入選を続けて実績を積み重ねていきます。帝展から新文展を経て昭和二十一（一九四六）年から開催された日本美術展覧会（日展）では、審査員による監査なしでの出展が可能となる「無鑑査」に認定され、画家としての評価を確かなものとなりました。この青峰が、いつから千住大川町に居を移したのか、その具体的な時期は定かではありません。しかし、当時定期的に刊行されていた画家番付（名鑑）を見れば、少なくとも大正十二（一九二三）年の頃には、千住を住居としていたことが分かり、青峰の画家としての歩みは、千住での生活と共にあったことが窺えます。そして、着実に地域からの信認も得ていき、戦後の足立の芸術家たちによる大同団結を志した「足立文化協会」の結成に至っては、その中心を担うこととなるのです。■足立文化協会の発起人として 戦後間もない昭和二十四（一九四九）年、足立では早くも、芸術文化団体の結

成を目指した運動が現れ、現在の足立区文化団体連合会の前身となる足立文化協会が結成されます。この時、日本画団体「青龍社」の一員である後藤大学、日本美術院主催の「院展」に参加する大西郷鳥（いずれも詳細は調査中）と共に、発起人となって結成準備に奔走したのが池澤青峰でした。

同協会は文化活動のための公会堂の設立や、日本画に限らない各芸術分野の団体の組織、そしてその団体による催事の開催などを活動の趣意とし、発起人である青峰・大学・郷鳥の他、区内から多くの名士たちが賛助会員として参加しました。

その後、絵画・書道・華道・民謡・舞踊・俳句など各団体の集合組織と



図2 池澤青峰 《芍薬》
絹本着色 昭和時代初期～30年頃 当館蔵 浅川家寄贈

として体裁を整えていき、結成二年後の昭和二十六年に、名称を足立区文化団体連盟に改めます。この年より毎年、足立区文化祭を主催し、そこには『足立史談』第六〇三号（平成三十年五月刊）でも紹介した西新井の教員洋画家、豊千里（ゆたかせんり）氏や、高浜虚子門下の俳人、為成菖蒲園（ためなりしよぶえん）（ん）、与謝野晶子の側近を務めた歌人画家の千ヶ崎悌六など、戦後の足立で活躍する多くの文化人たちも参加しましたが、青峰もここに欠かさず作品を出品し続ける他、中心役員の一人として運営を担いました。

そして昭和三十一年、文化団体連盟は現在の足立区文化団体連合会に改称します。その後も青峰は役員の一員であり続け、昭和三五（一九六〇）年に没する直前まで、監事や理事などを歴任しました。

■青峰を支えた千住の人々 地域の文化活動に尽力した青峰ですが、一方で地域の人々に画家としての活動を支えられていたという側面もありました。

大正の頃に茨城県から移って、千住で医院を開業する浅川家は、

青峰の有力な支援者であった一家です。青峰との面識もある現当主、浅川義次氏によれば、昭和当時、義次氏の父をはじめとする区内の医業者や、浅川家と郷里を同じくする茨城の人々で仲間を募って講（団体）を組み、定期的に青峰に作品を依頼する体制を作っていたと言います。そうして求められた作品の多くは、やはり青峰と親しい千住大川町の表具師、小野表具店の手で掛軸などに仕立てられ、講のメンバー各人の家々で使われる他、学校などの施設へと贈られたと伝わります。このような深い結び付きから、区内の家々や寺社などに青峰の作品が多く伝来することとなりました。浅川家よりご寄贈頂いた図2《芍薬》をはじめその作品は、近年の調査で続々と確認されています。

建部葉兆が活動した江戸の頃より、人の繋がりを活かして地域ぐるみで画家や文芸者と親しみ、理解者、支援者となってきたのが、足立の文化の特色と言えます。それは昭和にも続き、青峰もまた、その文化の中に入り、支えられた一人だったのです。

※池澤青峰の調査に際しては、ご遺族はじめ、浅川家、小野表具店の皆様にご教示頂きました。ここに記して、御礼申し上げます。

（郷土博物館学芸員）

千葉さなと甲府

あさくらゆう

平成二十二年（二〇一〇）のNHK大河ドラマ『龍馬伝』で脚光を浴びた「千葉さな」。北辰一刀流開祖千葉周作の姪であり、坂本龍馬と婚約した経緯を採り上げたことで当該年に大人気となった。そのブーム効果で千住仲町の灸治院跡に案内板が掲出されたことは記憶に新しいことであろう。

甲府市のHPでも観光情報として「晩年、さな子は千葉灸治院で生計を立てていた。そこへ通院していたのが山梨の自由民権運動家として知られる小田切謙明・豊次夫婦であった。その後、小田切夫婦はたびたびさな子の灸治院を訪れ、親交を重ねた。明治二十九年さな子は千住で亡くなり、谷中の天王寺（谷中霊園）に埋葬されるが、無縁仏になるのを恐れた豊次が晩年の千葉さな子と懇意であったことから、お墓をつくったのではないか。墓石には、表に「千葉さな子墓」、裏に「坂本龍馬室」と刻まれている。」とある。

ただ、そもそも何故甲府にいる小田切家は千葉さなの死を知りえたのか？少なくとも祭祀者である妹はまの夫、熊木庄之助が死去する大正七年（一九一八）までは有縁であり、

無縁ではない。鉄道も明治三十六年（一九〇三）にようやく結ばれるほどに遠く、険阻な甲州道の往来は過酷だ。その謎の一端が今回判明したので報告する。

事の発端は明治二十六年（一八九三）、千葉灸治院に小田切謙明が訪れたことに始まる。今でいう脳梗塞、

当時の脳卒中の治療に励んでいた謙明が東京帝国大学ベルツ教授に灸治を薦められ、あたかもさなの「千葉の灸」は卒中に効能があると謳っており、多くの患者が訪れていた。謙明もそのひとりとなり、帰郷する際には謙明に點灸法を教えている。

だが、謙明は帰郷してまもなくの四月九日、発作が起きて點灸後に医

師を呼ぶも、そのまま死亡した。当時の自由党所属で甲府の実業家と名声を得た謙明の死去は甲府内外の新聞各紙が多く報道したが、後継者のないことから顕彰活動も進まずに停滞していたという。加え、事業の借財も多くあったようだ。

この知らせを受けた千葉さなはその年の八月二十一日、甲府へ訪れたという。八王子までしか汽車がない時代、険阻の甲州道を抜けて甲府入りし、小田切家を援助したことが当時の山梨日日新聞紙上で窺える。

ところが、昭和になって刊行された『小田切海洲先生略伝』（村松志孝編）では「未亡人はさな子と親密に交際して時には不如意の家庭に援

助された事もあった。此人も明治二十九年十月十五日逝去され谷中の天王寺に埋骨したが、それを分骨して更に自家の菩提寺に埋め墓碑を建て供養する事にした。未亡人が其人の恩義を無にせずして死んだ後まで、誠意を尽す處に其人格のきらめきが見られる」とあり、この文体では豊次がさなの面倒を見てたとも採れてしまい、事実、大河ドラマで脚光を浴びるまで千葉さなは貧窮な人生のような描かれ方しかしていない。おそらく編者の過誤で生まれたか、なんとなくのイメージで分骨同様にしたかのいづれかであろうが、いつの間にか主客転倒されてしまった。この『小田切海洲先生略伝』を基に創作されたのが『竜馬がゆく』の「千葉佐那」であり、

いまも千葉さなを孤独なイメージで演出する作品も多い。しかし、実態はどうか？ 明確な根拠はあるのか？ という点、いままでは当時の新聞各位で裕福と述べていても感情的に否定する存在があるのは事実だ。

の場所の特定を行った。書籍において、飯沼村、西青沼、新青沼等、住居特定の根拠に混乱があったが、結果的に新青沼四十、四十一番地（現丸の内二・九）が小田切邸跡と特定出来た。当時の穴切通りと飯田通りが交差する宝一丁目交差点は村と市街の境界線上であり、その市街側に面した位置にあった。ちなみに号である海洲の名を冠した海洲温泉は桜町六十八番地（現丸の内一・九）だが、当該地番は小田切家所有ではない。

とりあえず小田切謙明名義の地所は新青沼であったことは事実だが、ここで旧土地台帳の所有主氏名欄が事実を語ってくれた（掲載写真参照）。謙明死去後、当該地番は七月三十一日に一子「うらの」が相続しているが、翌八月二十四日に千葉さなが買い受けていることが確認できたのだ。つまり、千葉さなは大金を持って甲府入りし、小田切家の土地を購入することで小田切家の住居の面倒を見ていたことが判明した。残念ながら登記簿謄本は大正期以後しかないので負債総額は産出出来ないが、地価が約九十七円として単純に現在の価格で六十五万を超え（インターネットサイト『日本円貨幣価値計算機』による）、家屋や利息等を加味すれば百万円はゆうに超えていたであろう。まぎれもなく小田切家の境遇を案じ、私財を擲ったといえよう。

新青沼の土地台帳（著者提供） 最下段に小田切謙明の名前と千葉さなの名前が確認できる。

度も訪問を重ねた際、せっかくなので小田切邸

私財を擲ったといえよう。

明治二十九年(一八九六)、さな死去後は正(まさし)が十二月九日に相続したが、直後にうらのへ名義変更がなされている。常識から考えればうらのに買戻すだけの経済力があるとは考えられず、実質の譲与であったと考えるのが妥当だ。おそらく遺言もあったのであろう。これだけの恩義を受けていれば千葉さんのために追想墓を作ったとしても不思議ではない。小田切家が千葉さんの訃報になぜ接する機会を得たのかもこれで氷解した。

千葉さんに関しては司馬遼太郎の創作から様々なキャラクターとして描かれたが、ひとつの過誤が誤った形で形成され、ようやく元の形に復原されようとしている。デジタルアーカイヴも進んだ現代であれば更なる千葉さんが証明され、顕彰されることを祈念したい。(歴史研究家)

文化遺産調査ガイドブック稿②

人物 谷文晁と写山楼の絵師

1 江戸の絵師たち

(3) 谷文晁の家

関東文人の総帥という二つ名で知られるのが文人絵師の谷文晁(たにぶんちよう)。一七六三(一八四〇)です。高名な南画家として知られ、

門人も多かったといえます。幕府の地方役人の家に生まれ、下谷二長町の一隅(現台東区台東一丁目三二番あたり)に住居兼画塾の「写山楼」(しゃざんろう)を構えました。

「出向」でしたから、広い意味で文晁の谷家は幕臣だったと言えます。ところが文晁自身は部屋住みでした。天明八(一七八八)年に奥詰見習となり寛政二(一七九〇)年には松平定信付で高百俵という旗本でも最も多数を占めるクラス—中級旗本—に出世しました。

■幕臣の谷家 文晁の家は幕臣で、祖父の本教は地方役人として著名な人です。近江の大津代官手代、のち幕府勘定所詰の役人を歴任し、『県令須知』という検地や水利などの地方支配の書を出版しました(名著で明治時代にも再版されています)。

田安家付の中級旗本としての谷家は文晁の子孫が継承しました。家督は長子であり絵師だった一世文一が後継者でしたが、若くして亡くなり、弟の文二と、子の文五郎が継承します。しかし幕末の慶応三(一八六七)年に一世文一の子、文中(啓次郎)に継承され明治維新を迎えました。

また父の本修(号、麓谷)は田安德川家の普請方役人として「吏事」につとめた人物でした(森銚三「谷文晁伝の研究」)。

二世谷文一の家 絵師としての谷

田安德川家の家臣は、幕臣からの

絵師としてのの谷



絵師というより幕臣らしい烏帽子姿の谷文晁像
門人の野村文紹がまとめた『肖像』(国立国会図書館デジタルコレクション) 所載。

文晁、さらに幕臣としての谷家の後継者と目されていたのが一世谷文一でした。絵画に秀でており昭和女子大学准教授の鶴岡明美氏は岳父であった文晁自身にも影響を与えたと評価しています(『谷文晁と二人の文一』郷土博物館)。

一世文一には子の文逸(文一郎)がいましたが、幼少のため谷家の本宗を継がずにいました。しかし、祖父の文晁在世中から絵師として活躍しはじめ、後に二世文一として知られるようになりました。

二世文一は、幕臣としての家禄は継承しませんでした。丹後宮津藩(京都府宮津市) 本庄松平家の家中という譜代藩の家臣となりました。

絵師として活躍した時、文晁の門人であった渕江領沼田村(現、足立区江北)の船津文測と親交して船津家にもたびたび逗留、文晁の没後には写山楼の遺品を疎開させるなどして、今、足立区に文晁の遺品が伝来しました。

ところで慶応三年に幕臣の谷家を継承した文中(啓次郎)は、二世文一の実弟です。幕臣として、また譜代大名家臣としての谷家の明治維新は、文晁のひ孫の世代を迎えており、江戸と宮津でそれぞれ一世文一の子供たちが当主となった時に訪れたのでした。(文化遺産調査担当係)